楽曲構成について

楽曲の構成について、作曲者の石桁真礼生は「相当長大な複雑な様相を呈しているかに見えますから」とした上で、次のように校長あての手紙に書いています。

主楽想は2つの不要動機によって成立しています。即ち(A1)―(B1)―(A2)―(B2)―(A3)の5部からなっています。Aは流麗なのびのびした優しさと、転じては堂々とした力強さをもちBは溌らつとした若人の躍動する意気をもっています。そしてA、Bは交々出現しますが、あと程緊張感、高潮感をもち、最後の「光を」が全曲の完結的な最高潮部を形成しています。このAとBの「対比と調和」が楽曲の内面的な楽想であると言えます。演奏の秘訣もこの1点にあります。譜ヅラに於いては拍子が時々交替していますが、これは自然に行われているため歌唱は難解ではありません。(御自慢のトコロ)
《中略》　では末永く愛唱されることを念じつつ。

石桁真礼生の手紙が掲載されている『高志高校新聞』第7号
(昭和25年11月)
高志高等学校新聞部1950より

【豆知識】石桁真礼生は、偉大な作曲家！

- 昭和28年度NHK全国合唱コンクール高等学校の部課題曲「若い日の歌」を作曲。
- 著書の『楽式論』(音楽之友社)、共著の『楽典－理論と実習－』(音楽之友社)は、音楽を学ぶ人ならきっと手にする書物。
- 東京藝術大学の音楽学部長をつとめ、門下生によって構成された作曲家のグループ「環」がある。門下生には、飯沼信義・木下牧子・小林研一郎・高嶋みどり・横山潤子など、現在の日本の音楽界で活躍する作曲家がずらり！
- 福井在住のご縁がきっかけで作曲された校歌が多数ある。(宝永小・松本小・進明中・光陽中・森田中・気比中・小浜中など)

同級生に聞きました！「みどり葉の校歌の魅力って何でしょう？」パート③

- 歌詞・メロディともに福井の大自然を思う、ステキな曲です。
- いま改めて聴くと、ハーモニーも素晴らしい楽曲ですよね。誇りです。
- みどり葉はいい校歌だと、当時も今も周りの人たちによく言われ、誇らしい気持ちになりました。1番しかないのも好きです。
- 1番2番と同じメロディが繰り返されるのでなく、終わりに向かって歌い上げる、格調高いみどり葉の校歌が好きです。
- 長い！もし甲子園で歌うことになったらフルコーラスで流れるのかなと疑問に思っています。
- 同じことを思っている人は多いと思いますが、自分が生きているうちに一度でいいから甲子園でみどり葉が歌いあげられているのを聞いてみたいと思っています。

それぞれの校歌への思い

初代同窓会長　「おのこわれ、乙女われ、というところがいいなあ」

司会　先生、校歌ができる頃のお話を一つ‥。
加藤　私は校歌を一つ作りたいと思ってた所、生徒の方からもそう思いはじめたので、校歌作成委員会というものを作り、久米田先生を中心にしまして、今の校歌ができた訳です。(中略)
福沢　全く新しい所に、ほり出されたところに、おのこわれ、乙女われ、というところがいいなあと感じました。校歌のよさがあり、自由な時代が(中略)解放感と、しかも新しく独立した新しい高等学校だという気持ちがみちあふれた、嬉しかった校歌でした。伝統にこだわらず、今から作るんだという校歌でよかったですね。

「対談　高志の創成期をふり返って」初代校長(加藤竹雄氏)と初代同窓会長(福沢博氏)の対談記事
『同窓会報』創刊号　高志高等校同窓会　1983より

校歌の額
体育館に掲げられている校歌の額は、平成30年、同窓生(第38回卒業生)により修繕された。

校歌作成に関わった教師　「校歌制定への注文も、生徒の要望からまとめたもの」

久米田　先生と生徒のつながりはしっくりいっていた。その一番の象徴的なのが校歌の制定の時です。
辻広　校歌は初めからあったのではなかったのですか。
久米田　当時は福井地震の後で卒業式をする場所もなかった。1回目の卒業式は当時の福井市の公会堂で挙行したのですが、校歌がないのですから味気のないものでした。第2回生の松井君が提案して校歌委員会を結成、校長先生や牧野庸雄さんらと委員会に入って検討を始めた。
辻広　先生と生徒が一体となって進めたのですね。
久米田　牧野さんの音楽の先生である石桁眞礼生さんに依頼することになり、上京の時に石桁先生に会って、新時代にふさわしい一連の詩による内容で作ってほしいと申し入れました。先生は大変喜ばれ、今のような格調高いものができたのです。作詞は石桁先生のよく知っている森山謙一郎さんにお願いすることになった。森山さんは府立第七高等女学校に勤められ潮音社の歌人でした。

《校舎にあふれる歌声　全教職員もステージに》

辻広　高志の校歌は天下一品ですね。それが生徒の希望から生まれたのが、いかにも高志らしいですね。
久米田　その通りだ。校歌制定への注文も、生徒の要望からまとめたもので、他の学校にはない新しさを感じる。25年11月19日、福井市公会堂でその発表会をやった。私が制定までの報告をし、音楽の先生の小原みどりさんの指揮で発表会をやりました。新設校の生徒や先生の気持ちをグッと盛り上げたものです。今までにない気持ちを高揚させる内容だけに、これは誇れる話です。

「恩師対談　連帯強化図る校歌」高志高校の創立以来13年間在校した教師(久米田裕氏)と同窓会長(辻広信哉氏)との対談記事
『同窓会報』第5号　高志高等学校同窓会　1988より

第4代校長「高志高校の心である」

第4代校長坂井功氏は、「いのちを愛しめ」と題した文章で、『青葉若葉に風薫る、この清爽さに包まれて「いのち」のもつ剛く正しい美しさを、思い切り空高く歌いあげるこの心、この心こそわれら高志高校の心である。』と綴りました。

『高志高校新聞』第47号(昭和32年5月)高志高等学校新聞部　1957より

生徒会長選挙の公約に「校歌を大声で歌う」を掲げる

同級生(42回卒)の橋詰直起君は平成2年度前期生徒会長選挙の公約に「校歌を大声で歌う」を掲げ、「《みんなの歌心はひとつ》をテーマに、《校歌を歌おうじゃないか運動》を展開したい」と述べました。

『高志高校新聞』第7号(平成2年3月)高志高等学校新聞部　1990より

平成2年度前期生徒会
『高志高校新聞』第147号(平成2年7月)
高志高等学校新聞部　1990より

同級生に聞きました！「みどり葉の校歌の魅力って何でしょう？」パート④

- 橋詰君の生徒会長公約の一つが、「大きな声で校歌を歌う」でした。彼は、ちゃんとそれを実行していました。つられて少し大きな声で校歌を歌うようになりました。
- 入学当初、校歌を暗記するように厳しく指導を受けましたが、音楽が苦手で辟易したのを覚えています。今聞くと、他校にはない重厚さのあるよい校歌ですね。

<おもな参考資料>

高志高等学校五十年史編集委員会.『高志高等学校五十年史』　福井県立高志高等学校1998
ほか『高志高校新聞』高志高等学校新聞部、『同窓会報』高志高等学校同窓会、校誌『緑葉』高志高等学校等(号数は本文に記載)
NHK. NHK全国学校音楽コンクール「Nコンのあゆみ」過去の課題曲リスト
https://www.nhk.or.jp/ncon/archives/theme.html(参照2021-1-10)
福井県教育総合研究所教育博物館.「福井の教育」展示
国立国会図書館.レファレンス協同データベース「長野県出身の歌人 森山謙一郎氏の没年を知りたい」
https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000292361(参照2021-1-18)

<あとがき>

みどり葉の校歌の魅力って何だろう、そして校歌はどのように生まれたのかを紐解くため、わたしたちは高志高校の図書館へ行き、保管されている資料の中にそのヒントを探しました。

高志高校が昭和23年に誕生、それに合わせて校歌・応援歌を作ってほしいと生徒たちから要望が高まり、校歌を依頼することになった経緯を知ることで、当時の熱い思いが伝わってきました。また、作曲された石桁真礼生先生は日本を代表する偉大な作曲家であり、高志高校の校歌が素晴らしいと言われる所以を知ることができました。

校歌は、その学校に在籍している人や卒業した人によって、大切に受け継がれていくものです。先人たちの思いを受け継ぎ、後輩たちへと歌い継がれるみどり葉の校歌が、これからも高らかに歌われることを願っています。　(荻原)

企画・構成　荻原美和・鷲山香織